

古文書と暴瀉病(三右衛門日記) その3

服部 瑛

医療法人はっとり皮膚科医院理事長

はじめに

前回(41巻2号 P.182)は、幕末流行した暴瀉病(コレラ)の全国的な広がり注目した。それは、全国に蔓延して数十万人にも及ぶ大災害だった可能性が高い^{1,2)}。今回は、その広がりの中から一点の地域を捉えて、当時の人たちは暴瀉病にどう対処したかを追ってみたい。

高崎の隣町に中山道の宿場町玉村宿がある。そこでも暴瀉病騒ぎがあった。そこに住む渡辺三右衛門という人物が、暴瀉病を克明に日記に書きとどめた(図1)。日記を読むと、当時の混乱と未知の病を恐れるさまがあらまのまに迫ってくる。さらに幕末の医療の実態も浮かび上がってくる。当時の医療は、蒙昧として稚拙というしかない。しかしすべての先人が通らざるを得なかった歩みの一端を知るよい機会ともなる。

三右衛門日記

玉村宿の渡辺三右衛門は、若くして玉村福島村の名主役を務めただけでなく、玉村寄場組合の大惣代とし

て、俗に「八州廻り」として名高い「関東取締出役」に協力していた枢要な人物である。天保13年(1842)から明治2年(1869)までの28年間の膨大な記録を残し、それは『三右衛門日記』と呼ばれている。日記の内容は日常生活や公務のことなど詳細を極め、暴瀉病においても三右衛門の独自の視点からの記述が散りばめられている。

通常こうした報告は、古文書の「翻刻」を掲載してからその見解を述べるのだが、今回は紙面の都合上、現代語訳のみを示すことにした。まず断っておきたいのだが、安政5年(1858)は上州での流行は少なく、江戸での大惨事を伝え聞いたもので、安政6年になって玉村宿に暴瀉病が及んだ。したがって暴瀉病に対して、安政5年は客観的に、同6年は主観的なものとなっていることを念頭に置いて読んでいただきたい。

安政5年のコレラ

いままで述べてきたように暴瀉病は、安政5年5月にアメリカ蒸気船ミッシシッピー号から長崎にもたら

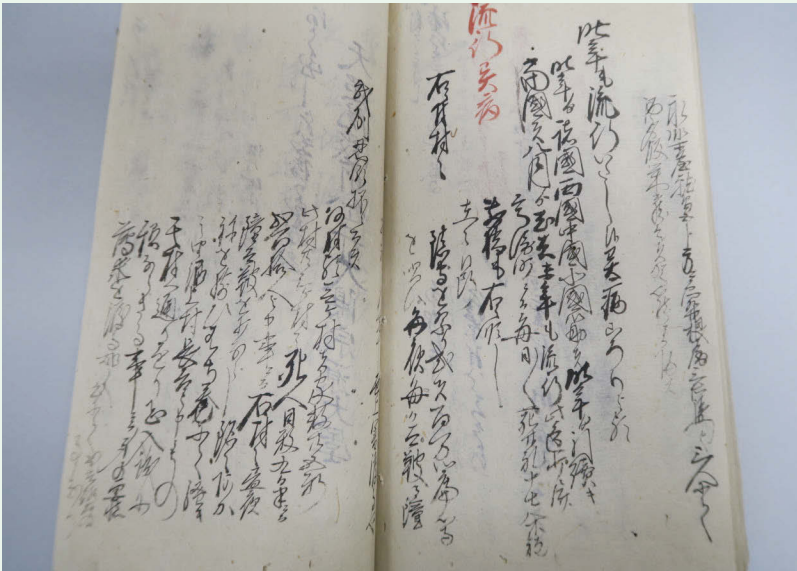


図1 三右衛門日記 安政6年9月5日の記事

され、速やかに全国に波及した。江戸では8月初め(一説には7月)大流行となったが、「戊午ノ年(安政5年)ノ秋モ流行スルト雖モ今年(安政6年)ノ数、去年ニ比スレハ百倍セリ」(『暴瀉病ニ付』)に見るように、安政5年ではなお上州での暴瀉病は少なかった。しかしその情報は逐一上州まで流されたのであろう。日記では、8月17日(旧暦)からコレラの記載がみえる。(「」内が日記の内容である。)

8月17日 知り合い三人の話では、「この頃江戸では、異病が流行して夥しい人が死んでいるという。一寸出歩けばあちこちで葬礼に行き合う。浅草通りの柳橋では一日に八十余葬が通った。死人焼場は九十九人迄受取とか。その他は寺々へ持っていくので寺に死体が積み上げられている。その病に罹ると、嘔吐下痢のため死んだようになって二日位で死んでしまう。医師はこの病氣の名を知らないし、一人も助けることができないでいる。世の人がいうには、唐人が悪狐を放したとか、また海へ毒を盛って日本人を殺そうとしているという話もある。なぜか男ばかりが死んで、女はその十分の一らしい。世人が話すには、多摩川へ毒を流すとか、海に毒を流すとかで魚の毒のため死ぬという話も聞こえてくる。始まりは東海道小田原辺りかららしい。甲州にも広がっている。実は異国のものを御府内に持ってきたという風聞もある。不思議で恐ろしいことだ」とあった。

前稿でも述べた^{1,2)}が、当時はコレラの流行することは知っていたが感染することはまったく理解できなかった。そのため医師たちは大いに困り果て、「漢医ハ始て出合候こと故、病名さえ不存中々療治行届兼候」(『安政記聞』)という状況だった。それでも従来の療治や神事にすがりしかなかった。

灸は重要な治療法となっていた。翌**8月18日**「本日夕方、この度流行の病氣除けのために京都より貴重な御火が届いた。この火でもって灸をするとよい。男は、まず左足親趾腹に三火、次いで二・三趾へ三火、かかとに三火、都合四か所に十二灸をすえる。女も同じだが右にすえる。この法で玉村宿の皆々が灸を据えている。福島村の半兵衛は灸の火を持ち歩き、当方は、親戚の角淵村の高橋直蔵殿へ夜飛脚を使って火を送り届けた」とあった。鍼灸は身近な治療法だったが、京都のしかるべき火が尊ばれていることに驚かされた。

言葉に宿っている不思議な霊威ともいうべき「言



図2 床には畳を敷き病人が框を手で支えて吐いている。その吐いたものを犬が舐めている。屋根からは悪霊(鬼)が覗いているが、この姿は人間にはみえない³⁾。

(絵巻物「春日権現験記」より)

霊」の世界も、この時代なお厳然として存在していた。病氣は悪霊がもたらすもので、その悪霊は歌を詠むだけで病氣退散が叶うというのである³⁾(図2)。

8月23日 「江戸流行病除ケ」として「我名ある家にはいるな 疫の神 名もなき家は とにもかくにも」[から吹返す 伊勢の神風 しようかんは 風のたよりに きくれども (悪鬼神牛頭天王之御歌か)]とあった(傍点部分は逆さまに書いてあった)。また疫病除けの品もあったようで、「唐からし かじの葉 葉らん 杉の葉 むくげ ひいらぎ ゆづり葉」の七品で、「右いづれも大戸(玄関)入口の上に歌の類は張る 七品は丸く祝い下ケル」という儀式を行った。

8月25日 「いかてかは みもすそ川(伊勢の五十鈴川)の流れくむ 人には寄らじ えきれい(疫病)の神」とやはり流行異病除けの歌が紹介されていた。但書の説明は「この歌は入魂^{じっこん}の人が申すには、明智光秀の室が読まれたものでえきれいが治った」というのである。

8月27日 三右衛門が吉田屋園蔵宅に寄ったところ江戸からの手紙を聞き取ったものが、「コロリという病は実にあえなく頓死するもので、長くても二日くらいで死んでしまうものです。誠に心細くなっております。

ます。ちょっと出かけて八九丁も歩くと葬礼に十五・二十も出くわしてしまいました。この前の地震(安政2年の安政大地震)の時よりも三倍も死人が多いのです。一つ、この病気を用心したいならば手足の爪の先に灸を三火すえるとよく、用心のために病前からやるのが一番の名法です。一つ、うどん粉とからし酢をよく練り手足の裏より膝までたくさん塗りますと十に八九は命が助かると言っています。心得として申し上げます」と紹介されている。根も葉もない噂がいよいよ広がっていく様子である。

幕府は、この突然の災厄に大混乱だったであろう。それでも病気の実態調査に乗り出した。9月7日「この程流行異病について組合村々において死亡したものは別紙の通り調べて来ル十三日までに千住宿まで差し出すこと。この廻状は、刻印し早々に順達し返還すること」というもので宛先は「問屋当番本陣 雅之丞殿」、対象は「勢多郡伊勢崎町より万場村までの十四ヶ村寄場」とあって、調査項目は、

「何月何日より何月何日迄

一 死失何人内男何人 地頭姓名
女何人 何国何郡何村

一 施薬の類 地頭姓名
米金銭何程 何 誰

右流行異病死失人其外 右ニ付施いたし候もの名前
書面の通り御座候 以上

牛九月日 何国何郡何村
寄場 誰

関東御取締御出役中様」

というものだった。当時でもこのような実態調査が公的な指示で行われていたことを知ってびっくりした。

その3日後の**9月10日**、玉村宿では早速「組合村集会」が開かれた。「関東御取締御出役様よりの流行異病に関しまして、組合村々には該当者がおりませんので村々より刻印を押して雅之丞様に提出致しました」という結果報告となった。3日という素早い対応である。幕末とはいえまだまだ幕府の行政システムはすこぶる健在だった。そこには、江戸ではたいへんなことがおこっているのだが、「オラが村は大丈夫だんべ」といったのんびりとした雰囲気を感じられる。

この時期、幕府は問題が山積していた。安政5年春に井伊直弼が大老となって、6月19日「日米修好通商条約」締結、8月8日「戊午の密勅」から始まって、「安政の大獄」への峻烈な道へ、7月6日將軍家定死亡、慶喜と慶福との「將軍継嗣問題」などで内憂外患の混迷のつぼと化していた。しかしながら為政者としては、なんらかの対策を講じなければならない。

9月11日 岩瀬肥前守(老中)からのコレラ予防法。「薄羅紗又は薄木綿などで昼夜腹を二重に巻くこと。ノ桶に湯を入れてからし粉を加えて時々下肢をひたすこと。ノ家の中に焚き物をして湿気を除くこと。ノ一切菓子類を食べないこと」, 同治法「この病に罹ったならば、熱き茶の中へ焼酎を三分一入れ、砂糖を少し加えて呑み、又座敷を閉ざして風が当たらないようにして、上羅紗の切れなどに焼酎をつけて全身をこすること。但し、手足・腹など冷えたところは温鉄・温石にてあたため、又布に包んで暖くなるまでこするとよい」、出処は「この度羽田沖へきたオランダ船の医者よりの相伝である」とあった。

同じ日幕府からの「触れ」(老中間部下総守御渡)も紹介されている。この間部下総守の「触れ」は、前回も報告したように、瞬く間に全国に知れ渡った²⁾。再掲すると、「此節流行の暴瀉病はその療治は様々あるが、その中で素人が知る法を示す。この病を予防するには体を冷やすことなく、腹部には木綿を巻、大酒や大食いを慎み、消化し難い食物を一切とらぬこと。若しこの病に罹ったら早々に寢床に入って飲食を謹んで体を暖め、芳香散(桂枝、益智、乾姜の細末を等分に加えたもの)を用いるとよい。吐瀉が甚だしく体が冷えて来たならば、焼酎に龍腦または樟腦を入れ、暖めて木綿に切った布に浸して腹あるいは手足に刷り込み、芥子泥(芥子粉と饅頭粉を等分に混ぜたもの)を心窩部ならびに手足に時々貼ること。別法としては、座敷を締め切り木綿の布などに焼酎を浸して何度も体を擦るも又よく、あるいは、手足の先や腹部が冷えるところを温鉄や温石を布に包んで湯を使うのもよい」とあった。ことに芳香散に関しては、「芳香散といふる薬を用ゆへし、是のみにして治するもの少なからず」さらに「此節流行病甚だしく諸人難儀いたし候ニ付其症ニ拘らす早速用ひ候而、害なき薬方諸人心得として

相達候事」とあったから、皆大いに安堵したことであろう。これでコレラ対策は十分だと思ったに違いない。幸いなことに安政5年のコレラは、「右之流行病九月末ニ至て止」(『安政記聞』)と、秋寒のためかいったん消退したのである。

安政6年のコレラ

安政5年夏の江戸での大災禍の後、一年が安穩に過ぎた。昨年コレラの大騒ぎがあったのに、と思い出したのかもしれない。**8月25日**「流行のコロリが来ないように玉村宿では大々的に八幡様で祭りを行った」。つまり疫病は神のなせる業(悪霊)なのである(図2)。この神事を終えて大いに安心したことであろう。

しかしあろうことか、**9月1日**「玉村七丁目□屋女房ころりにて死す」。この驚きはいかばかりだったろうか！

9月5日「コロリは昨年、西国・中国・北国の諸国に流行したが今年も引き続き流行している。上州でも昨年少し流行したがここ玉村は少なかった。八月に入って高崎では毎日葬儀が十七、八程あったというし、前橋もほぼ同じらしい。そのため皆、鎮守神を祭り、あるいは百万遍念仏を唱えている。また毎夜太鼓・鐘を打ち鳴らしその音が響き渡っている。武州の忍領では、何村か分からないが、三ヶ村は家数二十五軒に災いが及び、この村も含めて三つの村で、九日間ほどで死人二百拾人にもものぼったということだ。そこでは昼夜、鐘・太鼓を打ち鳴らして茜色のハチマキ締めて騒ぎ回っていたそうな。沼上村の長吉という男がその村を通った時、切羽詰まった雰囲気にも身の危険を感じて恐怖を覚えたと話していた」。

続けて昨年同様「言霊」の世界である。「いつ頃だろうか帝様より 流行異病についてお詠みになった御歌。

梅が香は 一重計りか 匂ひして 外木の枝に移ることなし

このありがたい御歌で流行病は退却したそうな。

どこからか前橋御屋敷よりの書。

普 天下卒土濱無不在 王地汝 疫神速可退去
若不去者

勅 牛頭天王 以兵速可令征伐者也 宜命如件

政所 疫神等江」とまたまた「言霊」の世界となる。

漢文を読みやすくすると「普天の下卒土の浜、王地あらざるはなし、汝疫神速やかに立ち去るべし、若し去らざるは牛頭天王の勅により、兵を以て速やかに征討せしむべくものなり」となる。いわずと知れた牛頭天王は除疫神である。

そこまで疫病退散を祈っても、翌**9月6日**「玉村宿六丁目嶋田重右衛門宅で葬式があつて招かれ香典を送った。出席しなかったところ膳が送られてきた」。おそらく暴瀉病だったのであろう。悪疫の葬式には出席できなかったのでは、と考えている。

9月7日「五丁目秋田屋徳兵衛の母が夜ころりで死んだ。葬式に招かれ香料(香典)を渡した。出席しなかったところうどんを頂いた」と。やはり悪疫で葬式を欠席か？ こんなときにも商売気のある若者がいるもので、「八丁目の若者二人がころり異病除けのための芝居興行届けを出しにきた」とあった。どんちゃん騒ぎをやると悪霊が逃げていくらしい³⁾。

困ったときには、神頼みしかあるまい。「太田呑竜大権現よりこの度の流行病が取り付かない、という夢のお告げがあった。

黒豆 南天の葉 (又は)三つ葉

この二品を合わせ煎じ、家の中で一同これを吞み、その残りは家の廻りにムラなく撒き、

豆の残りは山に納める。これにて流行病除けとなる。これを聞いたものは銘々この作法を行ったという」。

9月8日「玉村宿下新田 中屋庄右衛門殿はころりながら九死に一生を得た。大津屋抱えの下女子供二人もころりを煩った」。

9月9日「夕方飯島村弥三郎親岩吉ころりにて死す。玉村下新田松葉屋雷輔、日野屋喜三郎の若者一人ころり」。

9月10日「玉村中屋庄右衛門殿死去。丸屋文吉の国元より尋ねて来た倅、三耕屋正助殿女房、片岡屋抱下女二人、神楽寺普請場柚一人らがころりを煩った」。

「弥三郎親岩吉がころりで死んで葬式費用が出せなかったが、白井屋音五郎・芳野屋角次郎・田中屋竹次郎ら三人が金一両を工面した。三人は弥三郎には返済無用ということだ」とその温情が涙ぐましい。「玉村六丁目紺屋 大黒屋常吉流行悪病に煩う」とあって、「(9



図3 玉村八幡宮随神門

月9日の)飯嶋村弥三郎親の野辺送りのその場より流行悪病煩う」だったので、悪霊が取り憑いたと大いに驚いたに違いない。こうして連日コレラ患者続出となった！ おそらく玉村宿はパニック状態に陥ったであろう。ますます神事に頼るしかない。

9月11日 「御廻状申し上げます。皆々様はご無事にお過ごしのことと謹んでお喜び申し上げます。この度悪病のため明十二日玉村八幡様神前(図3)において大々的に御神楽を奉納、またお御神札を進呈したく御参詣願ひ上げます。

9月11日

世話人 木嶋雅之丞・二見屋清之助・渡辺三右衛門」
と大掛かりな神事の通知。世話人渡辺三右衛門とはこの日記の作者で、かつ玉村宿の大惣代というボス的立場だった。

9月12日 「鎮守八幡宮神前において流行病除け太々御神楽奉納致す」と大いに神に祈ったのである。疫病は神のなせる業なのである。だから神社にすがることができる。しかしこの日も、「仕立屋龍吉、仕事師頭喜太郎、清水屋五郎兵衛、中野屋利喜蔵らが流行病に煩う(計7名)」と災難が引き続き発生した。しかし以後は死者がわずかに記されたのみでコレラは収束に向かったようである。

おわりに

以上が、『三右衛門日記』からみる安政5年と6年における玉村宿でのコレラの顛末である。日記から療治は、①灸、②歌を読むこと(言霊)、③効かない薬物

や食事、④神社仏閣の神事とお札、⑤鐘・太鼓を打ち鳴らすことなどに委ねられていたことがわかる。効果があるはずもない。こうしてみると、医学においてコッホやパスツールらの細菌の発見は実に革命的だったというしかない。欧米では1880年(明治13年)代に入って、病気をおこす「細菌」を発見するという劇的な展開があった⁴⁾。顕微鏡で突き止められた最初の細菌は炭疽症と結核のバクテリアだった。前者はルイ・パスツールによって1877年から1879年の間に、後者はロベルト・コッホによって1882年に発見されたという。コレラ菌は、1883年やはりコッホによって発見された⁴⁾。幕末当時、コレラの原因などわかつていない。

日記からは、安政5年の客観的な記載から一転して安政6年のコレラの災禍、奈落の底に落ちるさまが切々と迫ってきた。しかし神のなされることだから……と思っていたのであろうか？

9月13日 「昨夕行った盛大な御神楽でお金が余った」ので、「別当寺へ納め氏子安全のため護摩を頼んだ」と冷静かつ客観的に筆が進められていく。民衆は強い。

『三右衛門日記』は庶民の目からみたコレラの歴史を如実に示してくれた。庶民の目線からコレラの混乱を見事に捉えてくれた。それはわずか150年前のことではない。私たちは先人たちの歩みを謙虚に受け止め、これらの事実を医療の糧として考えていただければ望外な喜びである。

註 『三右衛門日記』は玉村歴史資料館に所蔵されている。調査では玉村町学芸員萩原佳子氏にお世話になった。古文書解読に際して毎日文化センター古文書講座の村野守市氏からご教授を賜った。ここに深謝する。その他、古文書『安政記聞』、倉賀野神社『納戸日記』、上原元伯『暴瀉病二付』を参照した。本文は、現代語訳にするため内容が変わらないように変更・割愛したことをお許し願ひたい。本稿はすでに報告した群馬県医師会報、849および850号(2019年)の内容を骨子として書き直したものである。

〈文献〉

- 1) 服部 瑛, 服部友保: 皮膚病診療 39: 330, 2017
- 2) 服部 瑛, 服部友保: 皮膚病診療 41: 182, 2019
- 3) 澁澤敬三編: 日本常民生活絵引 第4巻, 平凡社, 東京, 1992
- 4) ウィリアム・H・マクリール, 佐々木昭夫訳: 疫病の世界史(下), 中公文庫, 2014